

# インフルエンザ

## ■ワクチン効果

- 現在国内で用いられているインフルエンザワクチンは、ポリオや麻疹・風疹ワクチンほどの高い発症予防効果は期待できず、感染を完全に阻止する効果はありませんが、インフルエンザの発病を予防することや、発病後の重症化や死亡を予防することに関しては、一定の効果があるとされています。入院予防効果があった、死亡リスクを 42%減少させた、という報告があります。
- 予防効果が期待できるのは、接種が終わってから 2 週間後から 5 ヶ月程度と考えられています。
- 子どもにワクチン接種をすることで A 型の約 60%、B 型の約 40%を予防でき、また、児の入院を A 型で約 50%、B 型で約 30%減らすとされています。
- 6 歳未満の小児を対象とした 2015/2016 シーズンの研究では、発病防止に対するインフルエンザワクチンの有効率は 60%と報告されています。日本小児科学会では 6 歳未満児に対する効果は 20~30%、福島県の研究では 6 歳未満における効果は年度により 42~69%、入院防止効果は 71~72%と報告されています。
- 小児も成人と同等の効果があり、特に 1~5 歳までの低年齢層には発病防止効果が高いですが、1 歳未満の乳児には効果がない、といわれています。(このように 1 歳未満の乳児には効果がない、と断言している報告もあります)
- B 型インフルエンザには 50%前後の発病防止効果があるといわれています。
- A 香港型インフルエンザが流行した場合、高齢者では効果がかなり低いといわれています。健康成人であっても、A 香港型には発病防止効果は 30~40%と低めです。

## ■ワクチン接種方法

- 毎年流行の始まる前の 10 月末や 11 月からワクチン接種を開始するのが望ましいです。
- 一般的には 10 月から 12 月中旬までの間に行うことが適当です。
- 日本では 13 歳未満に一律 2 回接種が推奨されています。
- 1 回目の接種時 12 歳で、2 回目の接種時に 13 歳になっていた場合は、12 歳として 2 回目の接種を行って差し支えありません。
- 接種経路としては皮下注よりも筋注の方が効果が高いといわれています。
- 通常、6 ヶ月未満の児には接種しませんが、妊婦への不活化インフルエンザワクチン接種は、妊婦のみならず、生後 6 ヶ月までの児にも効果的であることが報告されました。
- 小児で 2 回目の接種を受ける前に A (もしくは B) 型インフルエンザに罹患した場合でも、他の型の流行開始に間に合うと判断され、かつ接種のタイミング (通常はインフルエンザ治療後 1~2 週間の間隔あける) を勘案した上で、2 回目の接種期間 (通常は 1 回目接種から 2~4 週間以内) に間に合うようなら、2 回目を接種する選択もありえます。

- シーズンによって、A 型で A (H3N2) 亜型と A (H1N1) pdm09 亜型の両方が同時期に流行すると A 型に 2 回罹患する可能性や、また B 型で山形系統とビクトリア系統の両方が流行すると B 型に 2 回罹患する可能性もまったくないわけではありません。現在のインフルエンザワクチンは、この 4 種類の混合ワクチンとなっていますので、仮に 1 種類に罹患してもワクチンの接種で、他の 3 種類の罹患を予防できる可能性があります。

#### ■ワクチンの今後

- 従来の鶏卵培養による不活化ワクチンの効果に限界があるのは、A 香港型インフルエンザです。一方、A (H1N1) pdm09 や B 型には、現行の鶏卵培養による不活化ワクチンで十分な効果があります。
- 高齢者用のインフルエンザワクチンとして最も期待されるのが、高用量不活化ワクチン (high-dose vaccine) です。
- インフルエンザワクチンを毎年接種していると効果が低下することが、最近いくつかの論文で指摘されています。

#### ■接種不適当者（予防接種を受けることが適当でない者）

- インフルエンザの定期接種で、接種後 2 日以内に発熱のみられた者及び全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を呈したことがある者には、インフルエンザワクチンの接種を行ってはなりません。  
（インフルエンザの「定期接種」においては、接種不適当者になることに注意する。）
- 妊婦については、平成 21（2009）年 10 月に添付文書が改正され、「妊娠又は妊娠している可能性のある婦人には接種しないことを原則とし、」の記述が削除されました。

#### ■免疫不全者におけるインフルエンザワクチン

- 免疫不全者（HIV 患者、癌患者、移植後患者）には有効性が証明されておりワクチン接種が勧められます。ただし、免疫不全者では 1 回接種で十分な抗体価の上昇が得られず、2 回接種が必要との研究もあり、年齢にかかわらず 2 回接種を考慮すべきです。安全性に問題はありません。

